秋田県立博物館研究報告第28号　63～74ページ　2003年３月
Ann. Rep. Akita Pref. Mus., No.28, 63-74, March 2003

展示報告　企画展「六郷の文人 後藤宙外 小杉天外」

糸　田　和　樹*　　中　村　美也子**

1　はじめに

秋田の先覚記念室は，秋田県立博物館内に設置された展示室であり，明治～昭和期に活躍した秋田の先覚者152人に関する記録や資料を展示，紹介している．

県レベルで先覚者の総合的な展示をしている施設は全国的に見ても特殊であり，開設から７年を経た現在でも他県からの視察などがある．

特に平成14年度は博物館の常設展示の大部分がリニューアル工事のため閉鎖中ということもあり，秋田の先覚記念室および菅江真澄資料センターが展示の中核部分を担うことになった．また，博物館教室や，学校団体を対象としたセカンドスクール的利用などの教育普及事業も，秋田の先覚記念室と菅江真澄資料センターを中心として行われた．

本稿では，この秋田の先覚記念室で７～11月に行われた企画展「六郷の文人 後藤宙外 小杉天外」の展示内容と展示に至るまでの経緯，および付帯事業の内容について実施記録として報告する．

2　展示の趣旨

秋田の先覚記念室の展示では152人の先覚者が紹介されているが，うち常設で展示しているのは58人に過ぎず，また，先覚者一人一人の展示スペースはごく限られたものであり，その業績の全てを紹介することは極めて難しい．そのため，常設展示されていない先覚者や，展示しきれない豊富な資料が収集されている先覚者については，年１回の企画展という形で紹介を行ってきた．

一昨年は外交官の「須磨弥吉郎」，昨年はデンマーク体操の普及に尽くした「斎藤由理男」と，ここ数年は常設で展示されていない先覚者にスポットを当てた企画展を行い，新資料の掘り起こしや紹介という面で一定の成果をあげてきている．

一方，今年度の企画展で紹介した後藤宙外と小杉天外は，いずれも常設展示でも紹介されている先覚者である．

しかし，後藤宙外も小杉天外も，常設展示の中で業績が網羅されているとは言い難く，特に後藤宙外は作家・編集者としての業績についてはごくわずかしか触れられていない．また，後藤宙外の遺族のもとには豊富な関係資料が残されており，こうした情報や資料を広く県民に供したいという目的もあった．

さらに，秋田県内では，失われつつある文人関係資料の収集を進めるという気運が高まってきている．この動きを受けて，秋田の先覚記念室でも中長期的な計画として「文人シリーズ」を企画しており，その第一弾としての意味も込めて今回の企画展を開催した．

さて，今回の展示で紹介した先覚者である後藤宙外と小杉天外だが，ここで二人の業績について簡単に記しておく．

後藤宙外は現在の仙北町の出身で，小説家・編集者として活躍し，明治文壇の中心的人物の一人であった．引退後は故郷の秋田に戻り，六郷町長を務めたほか，歴史研究にも成果をあげ，特に史跡払田柵跡の発見や木簡研究の先駆けとなったことは良く知られている．

小杉天外は六郷町の出身で，自然主義文学の先駆者として多くの作品を発表している．『はつ姿』『魔風恋風』などの一連の作品は，現在に至るまで刊行が続いている．

このように二人は六郷町との縁が深かったことから，展示のタイトルを「六郷の文人 後藤宙外 小杉天外」とし，六郷の地名を前面に出した．これにより，六郷町の関連施設とのタイアップが可能になり，展示の広報や博物館教室で便宜をはかってもらうこともできた．

*秋田県立博物館　**秋田県立博物館　Akita Prefectural Museum

3　資料調査の経緯

企画展を行うに当たり，平成13年度から以下の日程で資料調査を行った．

【平成13年度】

11月２日　六郷町学友館　　資料調査
11月13日　日本近代文学館　資料調査
11月14日　鎌倉文学館　　資料調査
11月29日　仙北町 個人宅　　資料調査

これらの調査は，主として現在知られている資料の所在確認と状態調査，および展示資料としての利用の可否の交渉などが中心となった．

後藤宙外・小杉天外ともに首都圏を中心に活躍した時期が長いため，日本近代文学館や鎌倉文学館での調査は必須であった．しかし，日本近代文学館や鎌倉文学館には関係資料が多数収蔵されていることが判明したものの，貸出しに際しては手数料が必要となることや，資料の移動に制約が多いことなどから，展示資料としての借用は断念せざるを得なかった．

11月29日の調査では，後藤宙外の縁戚の方を訪問し，その際に宙外の孫にあたる後藤博泰氏（埼玉県在住）が宙外関係の資料を所蔵しているという情報を得た．そこで後藤氏と連絡を取り，展示での利用のためという形で資料を借用した．資料は膨大な点数であり，大まかな整理はなされていたものの，詳細については未整理の状態であった．その後は博物館側で資料の整理を進めていくことになったが，その経緯は以下のとおりである．

12月27日　後藤博泰氏来秋の折，宙外関係資料ダンボール４箱分を借用
　　資料整理の作業を開始
14年３月　資料の一部について報告
　　（館内の研究報告発表会）

【平成14年度】

４月５日　後藤博泰氏来秋．博物館に立ち寄り，資料の状況を確認
　　追加分の資料を借用
４～６月　整理作業継続
６月４日　資料の仮目録完成．リストと資料の点検開始
８月９日　後藤氏来秋，追加資料を借用

資料整理は13年度から継続しておこなったが，膨大な資料点数のためリスト化するまでの整理作業に予定以上の期間が必要であった．

一通り整理が完了した８月時点で，後藤氏から借用した資料は総点数3,976点を数え，明治時代の文壇資料として第一級の資料群であることが明らかになった．

この資料は展示資料としてのみならず，研究用資料としても極めて貴重なものであるとの判断から，後藤氏に資料を寄託していただくことを博物館側の意向として申し入れた．博物館の収蔵庫で資料を管理することにより，空調管理の行き届いた状態で保管ができるほか，不測の事態による資料の散逸や破損を防ぐことができるとの考え方であった．

その後，後藤氏と協議を継続し，一部希望のあった資料を返却し，それ以外は総て寄託していただくという方向を確認した．その結果，９月１日付けで「後藤宙外関係資料」資料総数3,822点として寄託を受けることになった．

資料の概要は以下のとおり．

【資料点数】

内訳	書簡	３,６０３点
	原稿類	１０２点
	その他	２７１点
	計	３,９７６点
うち寄託分		３,８２２点
うち返却分		１５４点

【資料内容】

明治～昭和期にかけての資料ではあるが，保存状態がよく，参考になる資料が多く残っている．膨大な資料のうち書簡がほとんどでハガキが多い．編集者として幅広い交流があったことが様々な文人からの書簡が残っていることでうかがえる．また，作品原稿も素稿と本稿の揃っているものもあり，内容がどのように変化しているかも比較検討できるものがあった．

なお，書簡の主な差出人は以下のとおり．

【文壇関係者】

・五十嵐力　67通
・石橋思案　31通
・泉鏡花　9通
・伊原青々園　116通
・岩野泡鳴　12通
・巌谷小波　17通
・薄田斬雲　35通
・内田魯庵　15通
・梅澤和軒　42通
・太田宙花　145通
・大町桂月　8通
・大山功　24通
・岡田孤煙　29通
・岡本綺堂　11通
・小川未明　61通
・小川煙村　23通
・小栗風葉　25通
・尾崎紅葉　8通
・角田浩々歌客　36通
・金子筑水　18通
・上司小剣　28通
・菊地幽芳　38通
・紀淑雄　17通
・幸田露伴　11通
・児玉花外　18通
・小林愛雄　12通
・西園寺公望　7通
・斎藤緑雨　15通
・笹川臨風　53通
・島崎藤村　6通
・島村抱月　44通
・薄田泣菫　26通
・高須梅渓　21通
・武内桂舟　28通
・田山花袋　8通
・綱島梁川　30通
・坪内逍遙　88通
・土肥晩翠　1通
・土肥春曙　36通
・近松秋江　10通
・徳田秋声　7通
・永井荷風　6通
・中桐確太郎　39通
・中島半次郎　46通
・中島孤島　75通
・中村春雨　36通
・夏目漱石　1通
・西村真次　21通
・昇曙夢　17通
・長谷川天渓　90通
・二葉亭四迷　10通
・平尾不孤　13通
・鰭崎英朋　96通
・広津和郎　13通
・広津柳浪　28通
・藤野潔　2通
・本多直次郎　45通
・前田曙山　13通
・前田林外　8通
・正岡子規　2通
・正宗白鳥　8通
・真山青果　16通
・守田有秋　25通
・森鴎外　2通
・柳川春葉　35通
・山岸荷葉　44通
・山中古洞　10通
・与謝野鉄幹　4通

他多数

【秋田県出身者】

・青柳有美　54通
・赤川菊村　2通
・安藤和風　74通
・伊藤銀月　11通
・小杉天外　115通
・小西正太郎　4通
・小西平洲　84通
・斎藤勘七　6通
・田口掬汀　33通
・寺崎廣業　25通
・内藤湖南　6通
・町田忠治　2通

他多数

【追加調査と資料借用】

このほか，平成14年度中に実際の展示構成を考慮した追加調査を行い，結果として六郷町学友館および秋田県立図書館から資料を借用した．

その点数と内容は以下のとおり．

六郷町学友館　14点

（後藤宙外著書，小杉天外写真ほか）

秋田県立図書館　14点

（後藤宙外・小杉天外著作）

4　展示構成と期間

【展示構成】

展示は７つのテーマから構成した．テーマと主な展示資料は以下のとおり．

1「後藤宙外＝早稲田の学生時代」
（学生時代の自筆ノート・同人誌『ともがき草紙』・島村抱月書簡）

2「後藤宙外＝『新著月刊』から『新小説』へ」
（雑誌『新著月刊』復刻版・宙外自筆原稿）

3「後藤宙外＝故郷秋田での活躍」
（『六郷町郷土史一斑』・『六郷町郷土史重要資料』・町田忠治書簡・宙外自筆短冊）

4「小杉天外＝自然主義文学の先駆者」
（天外自筆色紙・天外自筆原稿・天外著作）

5「宙外・天外と明治の文壇」
（坪内逍遥色紙・夏目漱石書簡・『明治文壇回顧録』・文人たちの年賀状）

6「西園寺首相と雨声会」
（西園寺公望書簡・雨声会招待状）

7「宙外・天外と秋田の先覚者」
（青柳有美書簡・小野進書簡・佐藤義亮書簡・滝田樗陰名刺）

【展示期間】

第Ⅰ期：７月16日（火）～９月１日（日）

第Ⅱ期：９月10日（火）～11月４日（月）

博物館全体での展示数が減少していることや，資料点数が多いことから，展示を第Ⅰ期と第Ⅱ期に分けて行った．Ⅰ期とⅡ期では基本的な構成は変更しなかったが，できるだけ多くの資料を来館者に提供したいということと，資料保護の観点から一部資料の入れ替えを行った．

5　広報活動・来館者の動向など

ＡＢＳラジオでの放送，魁新報社への取材依頼といった，各種メディアでの広報活動のほか，定期刊行の博物館ニュースやホームページなどを利用した広報活動を実施した．

しかし，博物館自体がリニューアル工事中ということで全館閉館中という認識を持っている方も多く，説明に苦労する場面もあった．

期間中は宙外・天外に縁のある方が来館されることが多く，貴重な情報を得ることができた．また，明治の文豪の書簡や年賀状のコーナーは普段目にすることが少ないこともあり，来館者には特に好評であった．

年表や業績などをまとめた解説資料も，展示を見る際に参考になるとの好意的なご意見をいただいた．

なお，展示期間中（７月16日～11月４日）の本館入館者数は4,683名であった．

5　付帯事業

今回の展示に関連して，以下の２つの付帯事業を行った．

・講演会「明治文壇における天外・宙外」
期日：８月10日（土）
講師：千葉三郎氏
参加者：43名
場所：菅江真澄資料センター内スタディルーム

例年講演会を行っている講堂がリニューアル工事で閉鎖中のため，場所をスタディルームに移して行われた．定員を超える43名の参加者があり，講師の千葉三郎先生のユーモアを交えた講演に熱心に聞き入っていた．

・博物館教室「六郷に文人の足跡をたどる」
期日：８月25日（日）
参加者：37名
場所：六郷町・仙北町

先覚者の足跡をたどる博物館教室として，宙外・天外に縁の深い六郷町と，宙外によって発見された仙北町の史跡・払田柵跡を訪れた．六郷町では平成７年に建立された文学碑，六郷町学友館，それぞれのお墓のある真光寺・善証寺，天外の生家跡などを見学した．仙北町では払田柵跡を散策．地元教育委員会の方のガイドもあり，柵の造りなどを詳しく学ぶことができた．

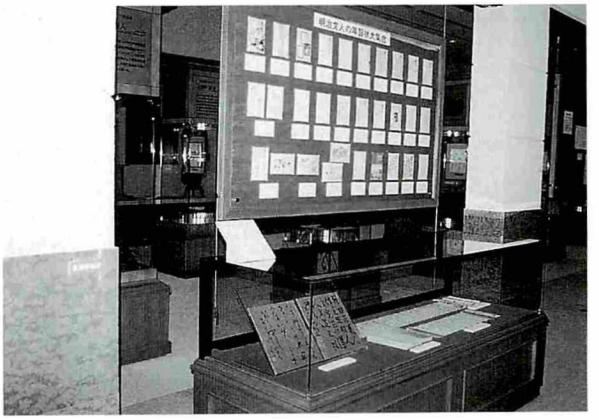
博物館教室「六郷に文人の足跡をたどる」の様子

7　おわりに

本展示では，後藤宙外・小杉天外の両名にスポットをあてて紹介する構成をとったが，小杉天外関係の資料のほとんどは鎌倉の文学館に寄贈されており，展示できた天外資料が非常に少なくなってしまった．資料の点数にあわせて展示スペースに差が出るのは仕方がないとはいえ，複数の先覚者を企画展で紹介する際の課題となった．また「六郷の文人」というタイトルでは両名とも六郷出身であるという誤解が生じやすく，宙外は仙北町の出身であるという指摘をする来館者もいた．タイトルについても慎重に吟味する必要があると感じた．

博物館教室や講演会については広報活動が博物館独自だけではなく，六郷町学友館など地域との連携がとれたことは大きな収穫であった．

展示の実際（あいさつパネル）



展示の実際（宙外・天外と明治の文壇）

展示の実際（展示室全体）

8　講演会「明治文壇における天外・宙外」記録

講演会の様子

（はじめに）

ただいま紹介にあずかりました，千葉三郎です．

私，近頃物忘れが激しくて，耳も遠くなっておりまして，自分でしゃべることにあまり責任を持てないんです．今日も皆さんにこうして雨の中集まっていただいて，せっかくの機会ではありますが，自分で今まで発表した雑誌の論文なんかも書いたものを忘れてしまって，一週間ほどかかってもう一度自分の書いたものを読み直してみたんですが，もしかしたら話しの途中で変なことに話が及ぶかもしれませんが，その辺はご勘弁願います．

（「文壇」の誕生）

お手元に後藤宙外，小杉天外の年譜と書かれたものと，用語の解説，これはこちらの博物館の若い学芸員の方が作って下さって，これだけあれば私の話すことはないような気がするんですが．しかも，これ，（演題を指して）こういう題名を付けるつもりも毛頭なかったんですがね，うまい題が浮かんでこなくてですね。明治文壇，これは文壇といっても別に壇があるわけでもないし，今であれば代表的なものは芥川賞，直木賞ですか．こういうのは別に壇というのではないんですが，今でも文壇といいますね．ましてや明治時代は芥川賞や直木賞はなかったわけですから，文壇という壇は，引っかかる点も皆さんあろうかと思います．

この文壇という，文学の壇というのを名付けたのは誰かということはですね，坪内逍遥が明治24年に文壇という言葉をはじめに使ったわけです．ご承知のとおり，坪内逍遥は帝国大学を出た後，明治18年に「当世書生気質」というのを出しまして，それから同じ明治18年には硯友社というのも，尾崎紅葉と山田美妙と，丸岡九華と岩谷小波と，全部で５人ですが，そういう人達が硯友社というのを結成して，「我楽多文庫」という雑誌を出しているわけですね．この坪内逍遥の当世書生気質と硯友社の我楽多文庫が出たのが明治18年，これが日本の近代文学の始まりだと言われているんです．

作品の発表舞台というのは，今なら新聞や雑誌でしょうが，雑誌の懸賞小説というのに応募して一等や二等を取ると，その人にはある程度作家というレッテルがつくわけですね．芥川賞や直木賞はなかなかちょっと取れない賞ですからね．秋田県で芥川賞を取った人は石川達三ですか．直木賞は渡辺喜恵子さんとか，千葉治平さんとか，今の西木正明さんですとか，こういう人達が取っています．明治の頃も，文壇に出る機会というのは主に新聞と雑誌なんですね．新聞と雑誌に発表したものが，その時代の評論家や作家によって，作品のここはこうだ，あそこはどうだ，ここはいいんじゃないかという評価があって，そういう評価によって文壇に躍り出ると，そういう機会しかなかったんです．

当時，明治20年代の後半から30年代というのはですね，新聞でいえば朝日新聞よりもむしろ読売新聞が発表の第一関門だったわけですね．読売新聞に発表できれば，これはもう，評価は別にしても，読売新聞に載るということで相当な地位を確約されるわけです．そこで良い作品となりますと，もう明治文壇の壇にあがるわけです．坪内逍遥が作った壇に上がるわけですね．この坪内逍遥は，明治20年代から30年代には，いわゆる文壇の大御所なんですね．その坪内逍遥に認められればこれはしめたものです．また，当時は森鴎外や，硯友社の尾崎紅葉の文学運動が文壇の一番の権威だったわけです．

ところで，これは硯友社ではないけれど，幸田露伴という作家がいますね．彼の「五重塔」という作品をお読みになった方もいらっしゃるでしょう．これがまた結構な作品でして，特に後半の嵐

の中，塔に登って，塔を支える宮大工の姿が迫力ありますね．まあ，それは硯友社ではないけれど，硯友社の場合は尾崎紅葉が中心となって硯友社文学というのを確立するわけです．これが最も盛んなのは明治20年代末期から30年代なわけですけれども，その中に例えばですね，どうしても文学で仕事をしたいということで，地方から出てきた若者が，坪内逍遥か尾崎紅葉か，そういった方々を頼っていくのが多かったんですね．

（天外・宙外のデビュー）

現に小杉天外なんかもですね，坪内逍遥と尾崎紅葉を訪ねるんだけれども，体よく断られるんですね．それから天外や宙外ではないけれど，明治26年の暮れに上京して27年の春に坪内逍遥を訪ねたもう一人の秋田県人がいるんです．雄和町出身の石井露月です．彼は最初小説家になりたくて坪内逍遥を訪ねるんだけれど，逍遥から小説家になるには第一に才能と，第二に財産が必要だと，それがなければ文学をやることは難しいと断られてしまうんですね．これは天外や石井露月だけではなく，そうやって断られた若い人がたくさんいるんですね．田山花袋なんかも一時は坪内逍遥を頼るんですが，まだ修行が足りないと，訪ねた時点ではどうしようもなくて，明治30年代半ば以降でないと作家として認められないという時代がありました．

それで後藤宙外の場合はですね，東京専門学校の，今の早稲田大学，大隈重信の作ったものですね，この文学科を明治27年に卒業しておりまして，その文学科の先生が坪内逍遥でした．それから大西祝という先生がいまして，また，他にも英文学をやった先生とか，そうそうたる先生が東京専門学校の文学科におりました。卒業するときに，一番で卒業したのが島村抱月で，二番目が後藤宙外なんです．後藤宙外の卒論というのが，「散文詩の精髄を論じ美妙，紅葉，露伴の三作家に及ぶ」という長いものでした．これが坪内逍遥に大変褒められました．後藤宙外が二番になったのは，この卒業論文が坪内逍遥に認められたためなんですね．これは卒論として美妙，紅葉，露伴の三作家の作品の特徴と性格みたいなのを掘り下げたということで大変褒められ，卒業してから早稲田文学に転載されて，それが後藤宙外の名前をまず世間に知らせたはじめなんです．卒論の題名とはちょっと変えて，ただ「美妙，紅葉，露伴の三作家に及ぶ」という論文に変わったんですが，これによって後藤宙外の場合はまず，最初は評論家としてスタートしたということですね．それに比べて，これねえ，一人ならもっと話しやすいんですがね，二人だとあっちに行ったりこっちに行ったりしないといけないんで混乱するかもしれません．天外はですね，これは後藤宙外もそうだけれど，天外の場合もずっと下積みの時代があって，二人ともともと小説家や文学者ではなく，政治家を志した時代がありまして，それを話すと三時間もかかるのでやめますが，天外はイギリス法律学校ですとか，東京専門学校にもちょっと籍を置いたことがあるといいますが，でも名簿を調べてみますと小杉為蔵の名前はないんですね．もちろん，学校を１ヶ月や半年で辞めてしまう人は卒業名簿には載らないんですね．今でもそうじゃないでしょうか．中途退学の場合ももちろん名簿には載りませんね．ですから，天外の場合ははっきりした学校を卒業したという経歴はないわけですけれども，だから尾崎紅葉とか坪内逍遥に体よく断られたというわけですが，そこに偶然ですね，ここにも書いていますが，斎藤緑雨という作家ですね，これは天外よりも年が二つ若いですけれども，この人に拾われたというか，言葉がおかしいかもしれませんが．この斎藤緑雨というのがまた面白い人でしてね，普通の人であればとても一緒に暮らしていけないというか，これが風変わりな男で，三重県の出身なんですが，緑雨という雅号はですね，ちょうど若葉の季節に雨が降ってきて，雨が若葉をぬらした，そこから緑雨という号を思い付いたということです．それはまず普通でしょうけども，例えば尾崎紅葉の紅葉というのはどこから出てきたと思いますか。あれは文字通り言えば紅葉で，それは秋でしょう．でも紅葉は，彼の住んでいる西込の近くに紅葉山という小高い山があって，そこから紅葉というペンネームを使うようになったと．

（天外・宙外の号の由来）

では，天外，宙外はどうしてなのか。宙外，つまり寅之助の方が早くからこのペンネームを使っているんです．上京して，あちこち転々としてうまくいかなくて秋田に帰ってきて，その当時，明治21年ころですが，叔父さんである，今の大曲の花館の斎藤桂斎という代議士をやった人ですが，その人がちょうど秋田県の県議会議員をやっていたんですね，その手づるでもって叔父だということで，宙外のお母さんのお兄さんなんですね，それをもって県議会の書記になったわけです．ところがあまりに当時の県議会議員がだらしなくてですね，議場で酔っ払って寝てしまったり，欠席したりとだらしがなくて，あまり県議員がだらしないので，宙外は一書記でありながらその議員にハッパをかけまして，議長に怒られたわけです．また，議事録に例えば，何とかである，と書かなくてはならないものをですね，「ある」ではなく「ない」と書いたりしてですね，そういうことで県議会には長くいられなくてですね，こいつらといたら俺は駄目だ，ということになって，俺はもっと宇宙の外に出ると，この場合の宇宙というのは空間の宇宙ではなくて，世間の宇宙という意味です．そのため宙外というペンネームを使った，と本人がそういっています．

もう一人の天外の場合はですね，さっきの斎藤緑雨が付けたんですね．これは斎藤緑雨のもとで色々文学を教わろうと思って，同居生活をしますが，四畳半くらいの小さな部屋でですね．それまで天外はペンネームはなかったわけですが，斎藤緑雨が李白の詩にですね，唐の時代の李白ですね，その李白の詩に「金陵の鳳凰台に登る」という，律詩があるんですね．律句でなくて律詩です．いわば長詩，長い詩というのかな，この中に「三山半ば落つ晴天の外」という言葉があるんです，それから緑雨がこの小杉為蔵に向かって，君のペンネームはこれがいい，天外がいいんじゃないかということになって，それで天外になったんです．天外の号を使ったのは明治27年からなんですね．

ただし天外だけが号ではないんですね．皆さんご覧になってみれば分かるんですが，明治時代の作家というのは一人で三つも四つも筆名を持っているんですね．中には自分でも忘れるくらいの20や30も持った人がいるんですね．例えば安藤和風なんてですね，14，5もあるんですよ．それから能代の俳人の島田五空という人も12くらいあるんですね．明治の作家では坪内逍遥も8つか9つあるんですね．正岡子規も8つくらいあるんです．一人でたくさんのペンネームを持っていて，それをいろんな書く内容によって変えているということです．

天外の場合はこのほかに「草秀」というペンネームを使っていたようです．草秀というのは「そうしゅう」と読むんでしょうか．「くさひで」と平仮名で書いたのもあるんですよ．したがって「そうしゅう」と読むとは思うんですが，あるいは「くさひで」かもしれないと．もしかすると自分でも何を使っていたか分からないのではないですかねえ．

いよいよこの二人の作品の主なものですが，拾ってみるのはなかなか難しいですが，まず小説家としては天外の方が宙外よりも一年ばかり早くスタートをきっているということになるようですね．年譜の中には明治26年，斎藤緑雨との共著である「反古袋」を春陽堂から出版したとありますが，この中には天外の作品が三編入っていて，緑雨の作品は一編しか入っていないと．これがまず文壇に出る前です．その1年前に「改良若旦那」を国会に発表していると年譜にはありますから，宙外よりも一歩先に出て，小説の方で名前がいくらか世間に知られたということになるんです．

じゃあ天外というのはどういう小説を書いたかということを見ますと，例えばですね，これはちょっと変なものですが，宙外も天外も最初は政治青年だったんですね．ですから政治に無関心ではないわけです．ですから後で政治に関係する，例えば後藤宙外の腐肉団とか，これは政治と政治家の腐敗とかですね．そういう素材のものなんですけどね．天外の場合はですね，私が見た限りではですね，この年譜の中にはありませんが，明治27年ですが「どろどろ姫」というのがあるんですね．この作品はですね，変な小説なんですよ．ある伯爵のですね，これは華族なんですけどね，そのお嬢さんがいる．これは伯爵令嬢ですから顔が綺麗

だし，見目麗しく，いわゆる美形の女性なんですね．その女性にですね，ある東京美術学校の学生がですね，夢中になって，やっとその願いがかなって結婚するわけです．ところがですね，その画学生がそのお嬢さんがどんな癖を持っているかを知らないで結婚してしまったんです．結婚してしばらくして，その綺麗なお嬢さんがとんでもない癖があるんです．それはですね，困ったことに泥水を飲むのが好きなんです．泥水のほかに蛆虫が好きなんです．そういう奇妙な癖があったというんですね。これはですね，泥水をですね，いかにもうまそうにぐびぐび飲むんですね，その綺麗なお嬢さんが．それで一緒になった画学生がびっくりして，逃げ出すという，こういう奇想天外な小説なんですね．このどろどろ姫というのは．泥を飲むからどろどろ姫なんでしょうね．言ってみれば荒唐無稽な話なんですが，実際あった話ではなく，小杉天外がひとつ他の小説と違ったものを書いてやろうということで，わざと綺麗な美じゃなくて，醜いものに目を向けさせようとして書いた小説なんですね．異常な女性をモデルに，いやモデルはいないんですけど，天外が自分自身で造形した人物ですね．

これがどういう新聞に載ったかというとですね，「小日本」という新聞です．これは青森出身の陸羯南という方がいらっしゃいまして，彼が「日本」という新聞を出すんですね，明治22年に．その新聞がですね，あんまり政府の攻撃をするものだから，弾圧されてしまい，このままではやっていけないということで，これは「日本」には限らないんですが，これは三宅雪嶺の「日本人」なんかもそうですが，政府の弾圧を受けると発売禁止になってしまうので，ダミーを作って売るんですね．それがこの「小日本」なんですね．この「小日本」という新聞に名前を変えるんです．これが明治27年２月に出まして，７月に廃刊になっています．小杉天外が小日本に「どろどろ姫」を発表した当時はですね，正岡子規が「小日本」の文芸の部分の編集長になっていたんです．

この時「小日本」に載ったということはですね，このころ「小日本」では雄和の石井露月が記者をやっておりまして，ところが天外は露月を知らない，露月も天外を知らないんです．露月はまだ石井露月として知られる前なんですが，どうも同県人なら分かりそうなものですがね．やっぱり秋田県でも名前が売れてこないと，例えば同じ角館出身でも隣の家なら分かるかもしれませんが，まあ分からなかったわけですね．いずれですね，二人の間には同じ秋田県人でありながら縁がなかったということですね．

（天外とゾライズム）

小杉天外がいよいよもって，文壇に認められるというのは，年表にありますように，明治29年，このころからゾライズムの影響で作風が転換したとあります．また，両親のいる六郷町で静養したとあります．このころ天外は胸の病になっていたんです．しかも，この年は六郷町に大地震が起きているんです．これは秋田県史の年表を見れば分かりますが，400人が亡くなり，1,000人が怪我をし，倒壊家屋4,000軒という大地震だったわけです．たまたま天外が六郷に帰っていて地震にあったのが新聞に載り，それを見た尾崎紅葉から見舞いの手紙が来ています．このころからようやく尾崎紅葉が天外の作品をある程度認めるようになっているわけですね．

天外は胸の病がだいたい治ったあたりにまた上京しまして，紅葉のもとに師事するわけです．その頃，後藤宙外はある程度紅葉に認められておりました．当時の天外のゾライズムの作品に，「初すがた」というのがあります．これは明治33年の８月に春陽堂から出た作品で，ここに本を持ってきていますが，こういう前書きを付けています．口語体に訳すと「自分は自分の好みを満たそうとして詩を作るのではない．いうまでもなく，批評家の好みに合わせようとして，あるいは読者の好みに合わせようとしてやっているのではない．好みというのは盃の上の美酒のようなもので，愛する者は喜んで，しかし愛さない者はその香りを見てその席を避けようとする」というようなことを書いているんですね．

初すがたというのはどういうストーリーか簡単に説明すると，清元の歌舞伎座という舞台がありまして，その芸人である小しゅんという娘が，こ

れはとても美人で声も良いのですが，この小しゅんという人が評判になるわけです．人気者になったために，いろんなひいきがあるわけです．例えば高利貸や銀行員や，新聞記者とか，小説家とか，小しゅんよりも年上の女性とか，いろんな人物が錯綜して出てくるわけです．実際はこの小しゅんという女性はですね，読んでいくと普通の生まれではないんですね．お母さんが昔ある高い位の役人の妻になって，ところが生まれた子は夫の子じゃなくて，他の男の不義の子だったということがだんだん分かってくるんですが，お母さんはそういう本当の夫の子どもでない子どもを産んだために，夫が外国へ行って帰ってくる前に自殺してしまうわけです．で，おばさんの家に預けられて大きくなって芸人になったわけです。でも本当は色々と曲折がありまして，この小しゅんは自分が高利貸や銀行員や，色々な人から妾にならないかと言われますが，実は年下の恋人がいるわけです．でもその恋人と一緒になれないんです．で，その恋人は最後に髪を切ってお坊さんになるんです．恋がかなわなかった小しゅんはひいきにしてくれた高利貸にいやいやながらお嫁に行くというストーリーです．

これは単行本なんですが，大正12年２月に新潮社，角館の佐藤義亮の新潮社から出ているんですが，なんと初版は大正５年ですが，これは第58版なんですね．ということはですね，この初すがたというのはずいぶん売れた本なんですね．当時の常識として一版は４千から５千部出ているので，58版というのは，50版を4,000部としても，20万冊は売れているんですね．それほど大したことはないかもしれませんが，これがいわゆるゾライズムの最初の作品です．

次の「はやり唄」というのが明治35年に発表されるんですが，これも春陽堂から出すんです．これは初すがたとはちょっとテーマが違うんですが，やっぱり色欲，女性の性が主なテーマになっています．ただし，小説のモチーフというのは遺伝とか環境の問題を扱っているんです．

このですね，初すがたによって小杉天外は初めてですね，フランスのエミール＝ゾラの「ナナ」を下敷きにしたと，日本の明治の自然主義文学の一番最初に位置付けられるんですね．

ではいったいゾラの「ナナ」といのはどういう作品かというと，小杉天外の初すがたというのは，ゾラの「ナナ」を本屋で発見し，それを読んで日本風に当てはめて下書きにして発表したと言われています．では「ナナ」というのはどういう作品なのか調べてみました．エミール＝ゾラには映画にもなっている居酒屋という作品があるんですが．「ナナ」というのを簡単に説明すると，非常に肉体美の女性がですね，ちょうどアメリカの女優さんのような，誰だか忘れましたが，劇場にいるんですが，娼婦なんですね．娼婦ということは要するに，体を売って商売している女性なんですね．この女性にですね，銀行家や，侍従や，大地主だとか新聞記者だとか，新聞記者ってよく出てきますね，昔の新聞記者って悪いですね．こういう人達が出てくるんですが，こういう人達に肉体を売る高級娼婦なんですね．巨額の金でナナを自分のものにしようとするわけですね．ナナはそういう男からお金をじゃんじゃん巻き上げるんですね．男たちもですね，あんまり綺麗な女にだまされる人は日本にもずいぶんいるらしいですが，まあここにはいないと思いますが，間違いなくスッカラカンになってしまうという物語なんですね．ナナに惚れ込んだ男たちがずいぶん破滅してるんですね。ナナ自身も，天然痘にかかって体が腐乱状態になって，とうとう死んでしまうという，最後は悲惨な状況で終わってしまうという小説なんですね．

天外の小説も，似たような物語になるんですね．ですから，エミール＝ゾラのゾライズムというのを最初に導入したのは天外だと言うけど，天外はナナを下敷きにして，日本人の名前を当てはめて同じようなストーリーで作った小説なんですね．

これは当時「万朝報」という新聞がありまして，そこの社長が黒岩涙香というんですが，その人が「ああ無情」とか，「岩窟王」だとかいう作品を考案して，外国の文学を読んで，それを日本人の名前に変えて作品として売ったということをしているんですね．でも黒岩涙香「岩窟王」だとか「ああ無情」というのは，私は子どもの頃読んだ時は胸をわくわくさせて読みましたね．あまりかわい

そうで，なんでこう人間の運命というのは悲惨なんだろうと思いましたね．これがまた一日ぐらいでは読めないんですね，長いから。岩窟王なんてのは岩窟の中に20年も入っているんですから，これをいっぺんに読むなんてのはできませんね．

これはどちらかというと一般大衆向けだったんですが，小杉天外のようににゾライズムを下書きにして書いた，純文学といいますかは，天外が「ナナ」を下書きにしたのが初めてだということですね．

（宙外の作品）

時間がないのであまり詳しくは言いませんが，一方の後藤宙外のことで２，３挙げてみますと，宙外は最初に申し上げましたように評論で名を知られるわけですけども，小説の方では「ありのすさび」というものを発表します．これは明治28年の５月から10月に早稲田文学に連載されたものですね．これは豪農の主人が周囲に煽られて，奥さんとお母さんを残して東京に出て，政界に入るわけです．豪農の息子ですからお金を持っていたというのですが，政友会の幹部になって色々な有力者にお金を，田中角栄とは違うかと思いますが，イメージは近いですね，金をばらまくわけです．自分でも会社をやってその社長になるわけですが，そのうち政治家にだまされまして，会社は潰れ，しょうがなくてもとの郷里に戻ってくるわけです．そしたら置いていったお母さんと奥さんがいるんですが，留守の間はお母さんと奥さんの間は非常に良かったわけです。嫁さんは姑に仕える，姑は自分の娘のように可愛がるといういい状態だったのに，主人公が失敗して帰ってきたらですね，今度は奥さんと主人公の間は割とうまくいくんだけども，お母さんがそれに嫉妬するんですね．それで嫁と姑と息子という間で関係がおかしくなってですね，肉親あるいは骨肉の一家の関係がおかしくなってしまうんですね．とうとう奥さんは気が狂っちゃうんですね．発狂するんです．主人公も亡くなった奥さんの幻を追って川に飛び込んでしまうという，悲惨な小説なんです．

これはですね，「闇のうつつ」という小説もあるんですが，これも最後は気が狂って死んだりですね，駆け落ちしたりですね，最後はやっぱり悲惨な状態になって終わるんですね．また，「塵の身」というのも出すんですが，これもまた何とも救いのない，宙外自身が仙北町の高梨の自分の家が没落して，兄が事業に失敗して一家がバラバラになるという体験があったものですから，それをモチーフにしたような小説で，これもまた悲惨な小説なんですね．これらを悲惨小説，深刻小説といいます．

これは後藤宙外だけではなく，例えば小杉天外と同居した斎藤緑雨の小説に「女地獄」という小説があるんですが，これはどういう小説かというとですね，結局簡単に言うと，猛烈に惚れた女性に裏切られるんですが，その裏切った女性を憎さのあまり，鍋に油を入れて沸騰させて，その中に女を突っ込んでしまうというすさまじいものなんです．ただ，生きた女を油の鍋に入れるなんてのはできないので，実はその女性の写真を天ぷらにしてしまうんです．これも奇想天外な小説なんです．これが正直正太夫こと斎藤緑雨の小説なんです．

こういう悲惨小説というのは，例えば当時では広津柳浪という作家がおりまして，この人の「今戸心中」とか「黒蜥蜴」とかいう小説もこのように深刻な悲惨な結末になっているんです．明治20年代末期から明治30年代中頃までは，そういった悲惨小説，深刻小説，あるいは政治小説というのが一種の流行だったんです．それがやがて，宙外の場合は今度は政治小説，「腐肉団」というのがありますが，これは悲惨小説や深刻小説とは違いまして，最後は救いがないんですが，政治と家庭という二重構造になっておりまして，「ありのすさび」という作品の延長線上にあるものなんですね．これは私は読んでもあまり面白くなかったので，ここで貴重な時間を使って紹介するほどのものではありませんが，図書館に行けば本がありますので，それを読んでもらったほうが早いと思います．

腐肉団というのは作品としてはそれほど面白くありませんが，「塵の身」や「ありのすさび」と同じようなところがありまして，千葉県の地主の代表として地租増徴案という，政府の増税の案にかかわる運動をして，成功して家に帰ってきて，

家庭がまたごちゃごちゃとして，最後はあまり幸せでない結末に終わるという小説です．実際はそのころの政府の状況というのは，税金を上げる案が実は国会で否決されておりまして，小説の中に書いてある地租増徴案というのが国会で可決されて成功したというのは，実際とは逆なんですね．お読みになる時はそこに気を付けるとよろしいと思います．

（「新著月刊」と「魔風恋風」）

もう一つ申し上げますと，まだ時間はあるでしょうか，こちらの博物館で天外宙外展をやっておりまして，展示の中に「新著月刊」という雑誌がありますが，これは明治30年の４月から明治31年の５月まで出して，臨時増刊を含めて全部で15冊あるんですが，それをこちらの学芸の方にコピーしてもらって読んだんですね．小杉天外の回想記とか，後藤宙外の「無相窟」とか面白いんですが，読んでみると…もう時間がないですね．

本当は私は今回は「明治文壇における天外宙外」ではなく，「天外と宙外の友情」という題にしたほうが良かったかなあと，今朝目が覚めたらそう思ったんですよ．でも時すでに遅しで，そういう余裕がなかったものですから．

これは「魔風恋風」という小杉天外の作品ですが，岩波文庫です．これがいつの発行かというと，昭和62年，1987年４月で，岩波文庫の第８版で，岩波文庫の場合は１版１万冊で出しますから，少なくとも８万部は出してるということです．全部が売れたかは分かりませんが，いずれ岩波でそれだけ出しているということです．この魔風恋風というのは，確かに読んでみて面白いです．ただ，前半は面白いですが後半になると物語が通俗化して，何というか緊張感がないんですね．

小杉天外はこの魔風恋風を読売新聞に，尾崎紅葉の「金色夜叉」の後に発表して大評判になって，尾崎紅葉亡き後は小杉天外の魔風恋風で読売新聞が窮地を脱したというんですね．読売新聞が，再版に再版を重ねてどんどん増刷するんですね．当時小杉天外に対して，原稿用紙１枚に対して３円の原稿料を払っていました．３円というと，当時のお酒の値段が一升30銭くらいでしょうか，お米だって一石80銭くらいではないですかね，その当時で原稿用紙１枚に３円ですよ．それが一日に一回，新聞連載はだいたい原稿用紙３枚ですから，９円，それが一ヶ月30回として270円の計算ですね．それを７ヶ月続けたんです．そうするとその合計がですね，1,890円になります．1,890円という金額はですね，今だったらですね，１億８千万円くらいになるんではないでしょうか．その当時の一年の報酬で1,000円以上もらっているといったら，大学の大教授や貴族くらいのものですね．そのクラスだと1,000円から2,000円だったんですかね．何しろ100円あれば豪邸ができたというくらいですからね．原稿用紙で１枚３円というのは大変なことですね．今なら１枚30万円くらいのものですかね．

しかし魔風恋風はですね，最後は大衆文学になってしまって，そのため小杉天外は魔風恋風が終わると同時に通俗作家というレッテルを貼られてしまうわけです．それで小杉天外は完全に純文学の世界から遠ざけられてしまいまして，ところがこの小杉天外は死ぬまで小説を書いたんですね．昭和27年ですか，80歳を越えるまで小説を書いたんです．

（おわりに）

小杉天外が，宙外が亡くなった後の昭和14年１月１日に，魁新報に宙外君の追憶というのを書いているんです．これを読むと，二人がいかに少年時代から苦労したかや，政治の世界に入ろうとしてできなかったことなどが書いてあるんです．これを全部読みたいんですが，全部読むとがっかりするかもしれないので読みませんが，いずれ昭和14年の１月１日に書いています．二人がどう苦労して文壇に出たかというのを書いています．最後の一行に，「宙外君，君の感想はどうだ」と書いてあるんです．宙外はもう死んでるんですがね．そういうことを書いてあるんです．

話の内容が二人のことで右に行ったり左に行ったり，お聞きする皆さんも混乱したかと思うんですが，私の話はこんなところで終わらせていただきます．ありがとうございました．